

3) 野 菜

いちごの新品種「女峰」について

1 育成のねらいと経過

本県の早出し栽培に適する良質多収の品種を育成するため、昭和44年度にはるのかとダナーを交配し系1と系2を選抜した。系2とダナーの交配を昭和48年度に行い、その実生中より系210を選抜した。この系統は早生良質であったが、収量性が劣ったため昭和53年度に更に麗紅を交配した。この結果、実生780株より優良な4個体を見出し栃木番号を付して検討したところ、栃木2号が育種目標をほぼ満たしていることが確認された。

現地展示はでの実証をへて昭和59年産いちごとして出荷されたものも市場側より好評を得、昭和60年産では県内作付けが120haに達している。なお命名は昭和59年1月、種苗法登録は昭和60年1月である。

2 特 性

草姿は立性で育苗中の草丈は宝交早生より高く麗紅より低いが、促成栽培中の草丈は麗紅より高い。分けつはおう盛である。

葉色は濃緑色で光沢が強い。新葉はよじれながら展開してくるのが特徴である。

ランナーの発生は麗紅と同様に早く、かつ多い。花芽分化期は9月下旬で宝交早生や麗紅より早い。頂花房の開花期は宝交早生程度である。成熟日数は11月開花の場合約40日である。

花房の発生は麗紅より連続的である。

休眠は浅く、電照による日長処理には極めて敏感である。電照やジベレリン処理なしでもおう盛に生育し多肥では過繁茂になり易い。

促成栽培での着花数は頂花房15~20花、第1次えき花房は約15花で株当たり1.5~1.8花房発生する。第2次以下のえき花房は多数発生する。

果形は揃いのよい円錐形で頂花房の平均は12~13gである。果色は鮮紅色で果皮、果肉ともに堅く日持ちが良い。食味は良いが、収穫後半は酸味が増す。

表-1に品種比較試験の結果を示した。促成用品種の中でも生育はよく、開花期は遅い方であり12月収量は中程度であったが、5月までの収量は多かった。糖度、酸度とも高かった。

表-2に保温時期試験の結果を示した。10月~11月上旬までの保温で株当たり600gの収量を得たが、12月以後は極めて低い収量であった。

表-3に果実成分を示した。糖度、酸度はほぼ麗紅と同様であったが、アントシアニン、VitC、ペクチン含量で女峰は麗紅より低い値であった。

3 栽培上の注意点

麗紅に比較して保温期を遅らせた場合の減収程度は大きいので、保温開始適期の幅は狭いと考えられる。花芽分化促進処理には敏感なので積極的な早出し栽培を考慮すべきであろう。一方、過繁茂になり易く、果実の着色不良を招くことがあるので極端な「むし込み」は行わず、窒素過多に注意し、適正な株間をとって日照不足や多湿にならないようにする。

(担当者 栃木分場 川里 宏※) ※現在 野菜部

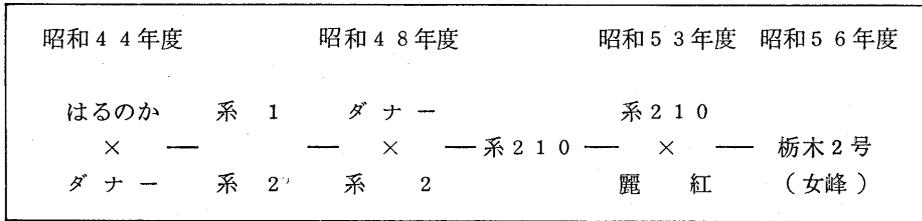


図-1 女峰の育成経過

表-1 品種比較試験の結果 (昭和57年度)

品 種	葉柄長mm		頂 花 房		果 重 g/株		糖 度	酸 度
	12月26日	開 花 日	成熟日数	12 月	12月~5月			
女 峰	140	11. 10	39	84	613	8.7	0.74	
はるよい	108	. 12	37	68	417	8.5	0.56	
てるのか	120	. 7	36	152	592	8.4	0.56	
宝交早生	94	. 9	39	87	468	7.9	0.56	
明 宝	128	. 7	41	87	520	8.8	0.63	
静 宝	99	. 2	33	116	447	8.5	0.70	
秀 紅	100	. 4	37	92	459	8.9	0.64	
麗 紅	135	. 12	50	32	674	8.3	0.71	

注 .糖度, 酸度は12~1月, 4回の平均

表-2 女峰の保温時期別収量 (昭和58年度)

保温時期	花房別収量 (株・g)			
	頂花房	第1次 えき花房	第2次 以 下	合 計
10月 7日	259	159	227	645
10. 24	217	216	262	695
11. 10	212	133	268	613
12. 10	114	87	192	393
1. 10	97	77	76	250

注 6g以上の可販果

表-3 食品成分

項 目	女 峰	麗 紅
し ょ 糖	2.05	2.40
ぶ どう 糖	2.35	2.25
果 糖	2.55	2.05
アントシアンmg%	16.9	19.5
く えん 酸 mg %	1,155	1,116
りんご酸	455	661
VC(還)mg%	58.4	89.6
ペクチン %	0.26	0.32

注 59年1月30日採果